



## 年間第 2 主日 (ヨハネ 2:1-11)

世話役はぶどう酒に変わった水の味見をした

降誕節が終わり、年間の季節が始まって一週間が過ぎました。今週は年間第 2 主日です。与えられた福音朗読は「カナでの婚礼」で、イエスが水をぶどう酒に変える驚くべきしるしを取り上げられました。

イエスが出来事に関わってくださると、危機的状況が予想もできない豊かさを生み出す場に変わります。最終的にカナの婚礼は、十字架上のイエスという悲劇的状況から全人類を豊かに満たすぶどう酒が湧き出ることの象徴でした。

先週は先輩橋口朝光神父様を神様のもとに送ることになり、本当に悲しい思いをしました。大先輩たちであれば、「全うしたなあ」と納得できたかも知れません。けれども 64 歳、佐世保地区の地区長としてまだまだ教区の大切な働き手を失ったことが、残念でなりませんでした。

私は、橋口神父様に謝っても謝りきれないことをしたので、それも悔やんでいます。一度橋口神父様の額をバットで殴ったことがあるのです。私がまだ新米司祭の頃、司祭団ソフトボール大会でのことでした。

当時長崎教区の若手・中堅司祭はゴロゴロいたので、ソフトボールも出番あればベストを尽くす、それだけでした。その年は打席で活躍し、ちょい役ではなくレギュラーで使ってもらっていたのです。試合が続く中で、「よっしゃ、次もヒットを打ってやるか」そんな気持ちで自分で持ち込んだバットで素振りをしながら試合会場を移動していたのです。

自分の後方で「ゴキッ！」という鈍い音がしました。そして後ろにいる司祭たちが「大丈夫か？」と言っているのです。振り向くと、移動しながら素振りをしていた私のバットで、どうやら橋口神父様の額を思いっきり殴ったみたいなのです。大変なことをしてしまったと思い、謝っていると橋口神父様から「周りを見たのか？お前だけがここにいるわけではないことを考えなかったのか？」と、大目玉を食らったのでした。

私は先輩に怪我をさせたしまった申し訳なさであるの試合は打って変わって結果を出せなくなり、あえなく控えに回されました。あの試合以来、怪我をさせたしまった橋口神父様のことが頭から離れなくなりました。13 日にお亡くなりになった、という一報を聞いた時、すぐに「バット事件」を思い出したのでした。

話は前後しますが、橋口神父様からは長崎の小神学院時代、鯛ノ浦教会助任として赴任してきた私の大神学院時代、浜串教会時代と、事あるごとにご指導いただいたのでした。今、お亡くなりになって思うことは、一人の司祭がどれほど貴重であるか、ということです。

橋口神父様は 10 人兄弟の第一子長男であったと聞いています。兄弟姉妹全員を代表する人を、橋口神父様のご両親は司祭職にささげてくださいました。ご両親が、10 人のお子さんを立派に育て、社会に送り出すのももちろん並大抵のことではありませんが、社会人の一人となるはずの人を司祭職におささげするのはもっと大変なことだと思ったのです。

司祭職は資格や条件で与えられるものではありません。十分な資格があっても、選ばれないこともあります。社会の物差しでは測れない部分があるわけです。水をぶどう酒に変えて、その場にいるすべての人に悲嘆や絶望の中から喜びを与えるイエスにしか為し得ない、秘跡の恵みがそこにはあります。条件や資格で言えば、同級生皆と何ら変わらない一人を、水がぶどう酒に変えられていったように、イエスは叙階の恵みで司祭に変えてくださるのです。

橋口神父様も、水がぶどう酒に変えられる体験をした一人でした。そして、受けた恵みが自分のためでなく人のためにあることを十分理解していました。ぶどう酒がぶどう酒であるのは自分のためではないように、橋口神父様も自分を人のために差し出して人生を終えたのでした。

ある時は、神学院で学生を育てる仕事です。期待に胸を膨らませて司祭になった、まずは教会に配属されることを望むはずですが、それを、大司教様の望みに答えて自分の思いではなく神様のために自らを差し出しました。神学院での奉仕は6年にわたりました。これだけ長かったのですから、小教区の主任に任命されてもおかしくありませんでした。

それなのに、次の辞令は助任司祭でした。本心は分かりませんが、思いとは違ったかも知れません。それでも橋口神父様は、自分の中の水が、ぶどう酒に変わって人々のお役に立てるように、自分の思いではなく神の望みに忠実であろうとしたのです。

最後は佐世保相浦教会の主任と、地区長の重責を背負いつつ、志半ばで旅立つことになりました。神様に不平の一つや二つ言いたかったはずですが、けれども自分の思いが水をぶどう酒に変えるイエスのわざの妨げとなるなら手放すのだ。そうしてすべてを委ねて旅立ったのです。

人間の力では、どう転んでも水をぶどう酒に変えることはできません。それができるのは神の子イエス・キリストだけです。イエスはそのことをカナの婚礼でしるしとして見せたのですが、最終的には十字架の上で見せてくださったのです。人が十字架の上で死ぬことを、誰が恵みに変えることができるのでしょうか？イエス・キリストだけが、十字架上での死を、全人類の救いの恵みに変えることができたのです。

水を、ぶどう酒に変えることのできるお方。十字架上の死を、全人類の救いに変えることのできるお方。そのイエス・キリストに生涯尽くした橋口神父様に、今週の福音朗読を重ねて考えてみました。

小学生中学生の男の子たちは、ぜひ考えてみてください。どんな一流大学を出ても結局は社会人にしかなれませんが、イエスに従うなら、あっと驚くぶどう酒に変えてもらえるのです。そして、イエス様からぶどう酒に変えてもらった司祭たちは、パンとぶどう酒をイエス様の御体と御血に変えるわざを、今も祭壇の上で繰り返し続けているのです。